

# 学習者のヘッジ使用：インタビューにおけるレベル別会話分析

早稲田大学

山川 史

## 1. はじめに

日本語のヘッジの例として、「ね」、「たぶん」、「けれど」等が挙げられる。ヘッジは、話し手または書き手が述べている内容に対する不確実性を表すだけではなく、話し手と聞き手、または書き手と読み手の距離を微妙に調整する待遇関係をも表すことができるため、ディスコースの中で大変重要な役割を果たしている (Holmes, 1984; Hyland, 1994; G.Lakoff, 1972; Lauwereyns, 2002; Nittono, 2003等)。しかし、そのような重要性にも関わらず日本語学習者を対象とした包括的研究が少なく解明されていない部分が多い。そこで、本稿ではヘッジを「話者の発話または発話行為に対して曖昧性を表す語彙」と広く定義し、インタビューテストでの学習者のヘッジ使用について日本語能力レベルとの関係を検証することにする。

## 2. 先行研究

ヘッジの定義は研究者により様々である。ここでは、ヘッジを包括的に研究したNittono (2003) を基に、ヘッジをヘッジの型、機能、ヘッジ行動の影響要因の3つに分け、以下のようにまとめた。

表1: ヘッジのまとめ

|            |                                                                                                               |
|------------|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| ヘッジの型      | 1) 語彙 (副詞、助詞、動詞、形容詞等)<br>2) 非語彙 (笑い、ポーズ、イントネーション等)                                                            |
| ヘッジの機能     | 1) 内容に対する「不確実性」(程度、量/度合い、数字の並列、類似等)<br>2) 内容ではなく「待遇関係」(責任回避、丁寧さ、仲間意識等)                                        |
| ヘッジ行動の影響要因 | 1) 社会的要因 (年齢、性、フォーマリティ、職業等)<br>2) 会話行為的要因 (依頼、断り、申し出、意見表明等)<br>3) 場面設定的要因 (グループサイズ等)<br>4) その他：実証されていない要因が多い。 |

多くの先行研究が、部分的であり、また、日本語母語話者を対象にしているため、学習者のヘッジの使用実態の包括的研究は大変少ない。特に、学習者のヘッジ行動の影響要因に関しては、上の表の「その他」に分類される影響要因が多いと考えられる。本研究では、学習者の日本語能力レベルに注目し、ヘッジの使用率との関係を検証する。

## 3. 研究方法

### 3.1. 研究対象者とデータ

研究対象者は、初級から超級までの日本語学習者合計40名と日本語母語者10名、計50名である。それぞれの学習者の内訳は、韓国母語話者と英語母語話者のそれぞれ5名ずつ計10名である。

学習者のデータは、ACTFLのOral Proficiency Interview (以下、OPI) を録音したKamada&Yamauchiコーパス (KYコーパス) であり、録音時間はどれも30以内である。また、日本語母語話者のデータには、上

村コーパスを用いる。これも、OPIを基に日本語母語話者にインタビューした会話が15分程録音されている。どちらも電子化されており、既に文字化されている。

### 3.2. 分析方法

本研究では、96のヘッジを分析対象とした。まず、それぞれの学習者のインタビューテストの単語数を算出し、レベルごとにその平均を出した。次に、その単語数に対するヘッジの割合を一つ一つのインタビューで算出した後、レベルごとにその平均を出した。そして、それらを線型分散分析により分析した。また、出現したヘッジを「不確実性機能」と「待遇性機能」との二つに分類し、レベル別の平均頻度数を出し、比較した。

## 4. 結果と考察

線型分散分析の結果、5%標準で、有意差がみられた ( $F(3, 36) = 38.81, p < .05$ )。つまり、学習者の日本語レベルが上がれば上がるほど、ヘッジの使用頻度が上がっていることが明らかになった。具体的に見ると、上級、超級レベルでは、複数のヘッジを組み合わせて使用していることがわかった。また、ヘッジの機能に関しても、学習者のレベル向上に従って、「待遇性機能」の使用頻度数が上がるということが判明した。このことから、学習者にとって、発話内容に対する「不確実性」を表すヘッジの使用はそれほど難しくないとが、相手との関係を微妙に調整する「待遇性機能」は、習得が難しいと考えられる。

## 5. まとめ

本研究では、学習者日本語レベルとヘッジ行動の影響について検証した。その結果、そのレベルがヘッジ行動の影響要因の一つであるということが判明した。しかし、本研究の問題点としては、対象者の人数が各レベル10名と少なかったこと、また対象者の背景を考慮することが出来なかったことなどが挙げられる。今後は、それらを踏まえ、学習者のヘッジ使用をさらに調査していきたい。

### 参考文献

- American Council on the Testing of Foreign Languages. (1999). *Oral proficiency interview tester training manual*. Yonkers, NY: ACTFL.
- Holmes, J. (1984a). Hedging your bets and sitting on the fence: Some evidence for hedges as support structures. *Te Reo*, 27, 47-62.
- Hyland, K. (1994). Hedging in academic writing and EAP textbooks. *English for Specific Purposes*, 13(3), 239-256.
- Lakoff, G. (1972). Hedges: A study in meaning criteria and the logical of fuzzy concepts. *Chicago Linguistic Society Papers*, 8, 183-228.
- Lauwereyns, S. (2002). Hedges in Japanese conversation: The influence of age, sex, and formality. *Language Variation and Change*, 14(2), 239-259.
- Nittono, M. (2003). *Japanese hedging in friend-friend discourse*. Unpublished dissertation. Columbia University, Teachers College.

### 用語リスト

ヘッジ＝話者の発話または発話行為に対して曖昧性を表す語彙（“Hedge” という用語は、日本語で「あいまい表現」「ぼかし表現」「言いさし表現」等と訳されているが、日本語訳が本稿の定義と

一致しないため、本稿ではカタカナ表記で「ヘッジ」とした。)

不確実性機能＝発話の内容に対して曖昧性を表す語彙。

待遇性機能＝聞き手との心理的關係に対して対して曖昧性を表す語彙。